

Title	九州大学大学文書館における展示活動と自校史常設展示の開始
Sub Title	The exhibition activities of Kyushu University archives and the opening of the permanent exhibition on history of Kyushu University
Author	藤岡, 健太郎(Fujioka, Kentaro) 中村, 江里(Nakamura, Eri) 赤司, 友徳(Akashi, Tomonori)
Publisher	慶應義塾福沢研究センター
Publication year	2022
Jtitle	近代日本研究 (Journal of modern Japanese studies). Vol.38, (2021.) ,p.1- 34
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集：学校史の展示とその展開
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-20210000-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

九州大学大学文書館における展示活動と自校史常設展示の開始

藤岡健太郎

中村江里

赤司友徳

はじめに

本稿は、九州大学大学文書館がこれまで行ってきた展示活動について振り返った上で、二〇二一年度より開始した九州大学の自校史常設展示について紹介するものである。

はじめに九州大学大学文書館について簡単に説明しておきたい。九州大学（九大）では一九八五年に九州大学七十五年史編集室を設置し、一九九二年までに『九州大学七十五年史』全四巻と写真集を刊行した。編集作

業を終えた一九九二年、編集室で収集した資料の保存と活用を図ることを目的として、大学史料室が設置された。大学史料室は二〇〇五年に大学文書館に改組され、二〇一一年「公文書等の管理に関する法律」(公文書管理法)の施行にともない、同法に基づく「国立公文書館等」の施設として、内閣総理大臣の指定を受けた。⁽¹⁾

当館は本学の学内共同教育研究センターの一つとして、公文書管理法および九州大学法人文書管理規程に基づき、保存期間が満了した法人文書の評価・選別を行い、保存すべき文書の移管を受け、それらを特定歴史公文書として保存・公開することを主たる業務とし、加えて退職教員や卒業生等から資料の寄贈を受けてそれを保存・公開することも行っている。またこのほか、大学史などの調査研究を行い、本学の基幹教育や大学院統合新領域学府ライブラリーサイエンス専攻の教育にも携わっている。特に基幹教育については「大学とは何か」「九州大学の歴史」の授業を行っているが、こうした自校史教育は国立大学としては九大が初めて行ったものである。⁽²⁾

施設としては九大箱崎サテライト内の旧工学部本館と旧本部第一庁舎内に事務室・教員室・書庫等を設けているが、常設の展示室はこれまでもつていなかった。しかしながら、後述するように様々な機会に企画展示を行ってきた。これらの企画展示は、当館の資料収集活動および研究活動の成果であるとともに、自校史教育とも連動するものでもあった。そして二〇二二年度より自校史常設展示「常設展 九州大学の歴史」を開始した。本稿ではこうした展示活動の経緯・内容等を紹介することで、大学アーカイブズが展示活動を行うことの意味を示したい。

なお、以下に述べるような諸事情により、本稿脱稿時点においてはまだ「常設展 九州大学の歴史」を全面的には開始していない。寄稿依頼を受けた時点では脱稿までに開始できる予定であったが、結果的に間に合わ

ないこととなってしまった。そのため本稿は中途半端な内容となっていることをお詫びするとともに、この点につき注意をいただきたい。

一 九州大学大学文書館における展示活動

(1) 目的・業務上における展示の位置づけ

九州大学大学文書館における普及事業の特徴は、七十五年史編集室設置以来、長らく収集・保存してきた資料と大学文書館設置に至るアーカイブズとしての組織体制の確立を柱に歴史学的手法による自校史を打ち立てたこと、その自校史をもとに教育と展示を展開してきたことにある。

まずは当館の展示業務に関わる規則をおさえた上で、これまでの展示会の背景と展開について説明したい。

「はじめに」でも述べたように、二〇〇五年四月、九州大学大学史料室を改組し、九州大学大学文書館が発足した。「九州大学大学文書館規則」は、大学文書館の目的と業務を次のように定めた。

九大に関わる法人文書等の資料を収集、整理、保存し、大学および大学の歴史に関する調査研究を行うとともに、その資料を学生、職員その他一般の利用に供すること

- ① 資料の収集、整理保存に関すること
- ② 資料の調査・研究に関すること
- ③ 資料の活用に関すること
- ④ その他大学資料に関すること

後述のとおり、当館は二〇〇五年頃から「資料の活用」に関する事業として、展示会活動を盛んに展開することとなった。

展示業務に関する規則では、当館が「国立公文書館等」の指定を受けたことも転機の一つである。二〇一一年公文書管理法の施行にともない、当館は内閣府から「国立公文書館等」の指定を受けた。国立公文書館と同等の施設になり、それまでに収集した資料の中から特に貴重なものを「特定歴史公文書等」としたことで、あらたに規程を設けることとなった。公文書管理法において、展示に関わる「利用の促進」の規定は、第二三条に「国立公文書館等の長は、特定歴史公文書等（第十六条の規定により利用させることができるものに限る）について、展示その他の方法により積極的に一般の利用に供するよう努めなければならない」となっている。

当館も「国立公文書館等」になったことを受け、「九州大学大学図書館における特定歴史公文書等の利用等に関する規程」⁽³⁾（以下、規程）を設けた。同じく第二三条に「図書館は、年度ごとに計画を定めた上で、展示会の開催、館内の見学会その他の取組を行い、特定歴史公文書等の利用の促進に努めなければならない」と定め、当館は明確に「展示会の開催」を業務に据えたのである。

続いて、当館が積極的に展示会を行った背景を明らかにしつつ、当館の展示事業の特徴を論じたい。

第一に、展示会を必要とした理由には、単に大学図書館が発足して従来の大学史料室よりも組織規模と活動内容が拡大したことのほか、九大のキャンパス統合移転事業が大きく関わる。一九一一年の九州帝国大学創立以来、約百年のあいだ箱崎地区にあった工学部は、二〇〇五年一〇月に第一陣が同地を離れ、新キャンパスの伊都地区へと移転した。また旧教養部の前身にあたる旧制福岡高等学校が置かれていた六本松キャンパスは二〇〇九年九月に閉校した。キャンパスの統合移転事業が本格化し始めた頃、学内外において自らのアイデン

ティティを問い直し、思い出の地を懐かしむ声が次第に高まっていく。

これらの声に応えるべく始まったのが、写真資料を活用した展示会であった。専用の展示室を有していなかったため、館外施設で開催しなければならず、小回りが利くように写真パネルを用いた小規模の展示会を行った。ホームカミングデー（現アカデミックフェスティバル）や大学祭等、学内関係者のほか、卒業生や地域社会の人びとが多数訪れる機会ごとに企画され、結果的に学内の多くの人が九大の歴史や建造物、風景についてあらためて知るきっかけを作った。視覚に訴え、郷愁を呼び起こした写真展は耳目を集め、卒業生を中心に各地での開催が求められた。このような外部での展示は当館と大学本部や他のキャンパスとの連携を密にし、また卒業生や地域社会との接点を持つに至らしめた。

もちろん、このような写真展を可能にしたのも、歴大な写真資料に裏付けられてのことである。七十五年史編集事業の頃から写真資料を収集していたことに加え、新キャンパスの土地造成計画が決定した一九九八年頃から移転に向けた大学の「現況」を写真と映像で記録する活動を開始した。また二〇〇三年以降、プロのカメラマンを雇用して「九州大学『記憶の保存』プロジェクト」「九州大学『伊都』記憶創生プロジェクト」等に発展した。こうしたプロジェクトの間に、元職員や技官から病院地区を中心とする写真やネガの提供も受けるようになった。このようにして当館は九州大学の過去から現在に至る写真資料を約二〇年間で約一五万コマ所蔵するに至った。

館外での展示会はもう一つの福音をもたらした。附属図書館の展示スペースを借用したり、総合研究博物館や医学歴史館との共催事業によって展示会場を確保したりしたが、図らずも学内の資料保存利用機関であるミュージアム・ライブラリ・アーカイブズ（MLA）の連携を強化せしめたのである。

当館が積極的に展示会を行った背景として、第二に、長年にわたって力を注いできた自校史の確立とそれによる自校史教育がある。資料収集の蓄積があり、アーカイブズが組織的・制度的に確立し、また専任教員とスタッフによる資料の調査分析等を行う研究体制が整ったからこそ、教育や展示会等への活用ができるようになった。展示会の動機となり、これを支えたものは、キャンパス統合移転事業や百周年記念事業を契機とする母校の歴史への注目や自校への帰属意識などアイデンティティの問題であった。

また展示会は、それ単体で完結したのではなく、自校史教育と連動したものであったことも重要である。自校史授業の際には、一度はキャンパス見学と展示会の観覧を組み込み、決して孤立した企画にならないように努めた。

以上のように、当館における事業の特徴は、自校史（教育事業）と展示（普及事業）とが両輪となり、ここに統合移転事業や百周年記念事業などを契機とする母校への帰属意識の高まりが推進力になったことが挙げられよう。

（2） 展示会の履歴

続いて、これまでの展示会実績について述べたい。詳しくは後掲表1で示したが、二〇〇五年以降に五回実施した。なお当館が「国立公文書館等」の指定を受けてから総務省に実績報告をするようになったため、二〇一一年からは入場者数を数えるようになった。

すべては紹介できないため、当館にとって重要であった企画をいくつか概観する。

当館は二〇〇五年三月の「旧制福岡高等学校展」を皮切りに、積極的に展示会を開催するようになった。こ

の展示会は大学文書館発足を記念して企画され、旧制福岡高校同窓会青陵会との共催により旧教養部が引き継いだ旧制福岡高等学校の事務文書と写真パネルを陳列した。この展示会は好評を博し、当館の教職員にアーカイブズが展示会を行うことの社会的意義や普及事業としての威力をあらためて認識させた。

繰り返しになるが、当館は展示会を行える専用のスペースを持たなかったことや九大が複数のキャンパスに跨がっていたことから、必然的に学内外の施設で行う出張展示会の機会を多くした。その内容は、歴大なコレクションを背景とした小回りのきく写真（パネル）展が大半を占めた。五十年史の編纂以来、写真資料を大量に収集してきたこと、本学が分散型のキャンパスであったことも大きな理由である。九州大学は箱崎地区、六本松地区、馬出地区、筑紫地区にキャンパスが分散していたことから、簡便に設営できる上に視覚に訴えやすい写真展が重用された。

工学系が移転を完了した二〇〇八年頃からは箱崎地区と新キャンパスの伊都地区に関する写真展を、六本松地区が閉校を迎えた前後には同地区に関する写真展をそれぞれ行った。これらの写真展は卒業生や地域住民を受け入れるイベントであるホームカミングデーや大学祭、創立記念日等の機会に毎年開催された。写真資料に加え、二〇一一年三月には六本松地区の、二〇一三年三月には箱崎地区のキャンパス模型を作成し、写真パネルとともに展示するようになった。⁽⁵⁾ 上記のイベント時には多くの卒業生や学内関係者がこうした模型を取り囲み、往時を懐かしんで盛り上がった。

附属図書館、総合研究博物館等との共催も当館事業を特徴付けるものである。その内容は多岐にわたるが、例えば、附属図書館とは「シリーズ展示・箱崎キャンパスの近代建築」「九大キャンパスの風景——桂木勝彦写真展——」（二〇一三年）等を共催した。総合研究博物館とは「写真でみる九大百年——箱崎馬出物語——」

表1 九州大学文学館における展示会

	展示会名	区分	開催期間	入場者数
1	旧制福岡高等学校展	外部展示、 共催	2005年3月	—
2	「九州大学の歩み——創設から伊都キャンパス誕生まで——」展	外部展示	2005年5月	—
3	九大の歴史をたどる写真展	特別展 (箱崎地区)	2005年9月	—
4	九大の歴史をたどる写真展	特別展 (伊都地区)	2005年10月	—
5	九州大学箱崎地区、病院地区の写真展	外部展示	2005年12月	—
6	第6代総長荒川文六展 (中央図書館2階常設展示コーナー)	特別展示、 外部展示	2006年7月18日～8月10日	—
7	九州大学の歩み写真展 (九州大学六本松キャンパス学生会館第二食堂)	外部展示	2006年12月3日	—
8	九州大学の歩み写真展～創設から伊都キャンパス誕生まで～ (九州大学六本松キャンパス学生会館第二食堂)	外部展示	2007年11月23日～25日	—
9	旧制福岡高等学校展 (九州大学附属図書館 (中央図書館 2階自由閲覧室))	外部展示	2008年8月20日～22日	—
10	九州大学の歩み写真展 (九州大学六本松キャンパス学生会館第二食堂)	外部展示	2008年11月22日	—
11	九州大学の歩み写真展 (九州大学六本松キャンパス学生会館第二食堂)	外部展示	2009年11月21日	—
12	写真で見る九大百年展	外部展示	2011年8月27日	80
13	講演会「六本松キャンパスの歴史と旧制福岡関係文書」	外部展示	2011年10月1日	50
14	写真で見る九大百年展	外部展示	2011年11月15日～12月18日	34,000
15	写真で見る九大百年展	外部展示	2011年11月19日	300
16	写真で見る九大百年展	外部展示	2012年5月12日	450
17	九州大学附属図書館貴重文物展示「九州大学百年の宝物」	外部展示	2012年5月15日～22日	519
18	九州大学の百年と学術研究都市づくり	外部展示	2012年5月25日～31日	4,010
19	ホムカミンソングデー2012 写真で見る「九大百年」展	外部展示	2012年10月20日	300
20	箱崎キャンパスの近代建築 第1回 戦前の大学風景	特別展	2013年5月9日～6月30日	250
21	第2回 戦争の痕跡／映画の舞台	特別展	2013年7月1日～8月31日	180
22	第3回 学生の集う場所	特別展	2013年9月4日～10月31日	150
23	第4回 最先端の研究の場として	特別展	2013年12月6日～2014年1月31日	220
24	九大キャンパスの風景——桂木勝彦写真展——	特別展	2013年8月2日～10月31日	300
25	音楽の調べ	特別展	2013年10月25日、11月1日、5日、8日	200
26	九州大学百年の空宝	特別展	2014年4月1日～5月12日	200
27	写真で見る九大百年展	常設展	2014年9月6日	100

28	写真で見る九六百年展	常設展	2014年10月18日	200
29	写真で見る九六百年展	常設展	2014年11月13日～14日	100
30	九大1968——林崎侑男の写真で振り返る——	特別展	2014年11月21日～2015年2月19日	150
31	九六百年展	特別展	2015年5月11日	220
32	写真で見る九六百年展、九大1968——江上節義・林崎侑男の写真で振り返る——展(同時開催)	常設展、特別展	2015年10月1日～31日	600
33	九大の歴史を語る什器たち——家具類と食器——展	特別展	2016年4月4日～5月20日	350
34	九大の歴史写真展、建物模型展示	常設展 特別展	年間、2016年5月11日	300
35	九州大学箱崎地区模型・九州大学六本松地区模型展示	常設展 特別展	年間、2016年10月15日	800
36	九六百年 美術をめぐる物語展	外部展示 特別展	2016年10月8日～11月3日	4,100
37	九大医学部50年前の風景 塩川都夫写真展——	特別展	2016年11月19日～12月25日	380
38	【ありがとう箱崎キャンパス】九州大学の百年(戦中・戦後編)	共催	2017年10月1日～11月12日	349
39	【ありがとう箱崎キャンパス】九州大学の百年(戦前・戦中編)	共催	2017年11月14日～12月27日	365
40	【ありがとう箱崎キャンパス】箱崎キャンパスの風景—桂木勝彦写真展 vol.1 四季	共催	2017年1月5日～2月12日	324
41	【ありがとう箱崎キャンパス】箱崎キャンパスの風景—桂木勝彦写真展 vol.2 建物	共催	2017年2月14日～3月29日	365
42	そして はごぶね は ゆく——AQAプロジェクト2017	共催	2017年12月15日～2018年2月14日	390
43	【ありがとう箱崎キャンパス】九州大学の百年(戦後編)	共催	2017年11月14日～12月26日	357
44	【ありがとう箱崎キャンパス】九州大学の百年(戦前・戦中編)	共催	2018年1月5日～2月20日	390
45	戦前の福岡における博物館研究の興隆と九州大学	共催	2018年4月1日～5月6日	345
46	箱崎キャンパスの風景——桂木勝彦写真展 vol.3 学び	共催	2018年4月3日～5月13日	380
47	特別企画展示 Furniture for Future	共催	2018年5月12日～27日	180
48	九大1968——林崎侑男の写真で振り返る	共催	2018年5月15日～6月28日	405
49	ありがとう箱崎キャンパス タイムクエスト	共催	2018年7月2日～31日	390
50	ありがとう箱崎キャンパス——学術遺産と学者たち——「伊都につながる百年」	共催	2018年9月25日～2019年1月18日	650
51	ありがとう箱崎キャンパス——学術遺産と学者たち——	共催	2018年12月1日～2019年3月29日	840
52	九州大学箱崎キャンパス閉校企画【ありがとう箱崎】	共催	2019年2月8日～10日	1,500
53	九州大学開学記念行事【特別展示会】	主催	2019年5月17日～26日	358
54	とほすかたり——学び舎の肖像——	共催	2019年9月14日～10月9日	50
55	Kyushu University Asia Week 2020 特別企画 九州大学のコレクション——大学創設期のアジア学術交流と古地図	共催	2020年9月1日～11日	WEB開催

展（二〇一一年）、「九大の歴史を語る什器たち——家具類と食器——」展（二〇一六年）等を共催している。学外においても、総合研究博物館と福岡県立美術館主催の「九大百年 美術をめぐる物語」展を共催した。また伊都キャンパス内に椎木講堂が建設されてからは、内部のギャラリーにおいても展示会を開催した（後掲表2）。

（3）館内における展示

当館では、二〇一八年二月より旧工学部本館一階、事務室・閲覧室前の廊下で、小規模テーマ展示を行っている。旧工学部本館来館者に対する文書館の認知度向上および収蔵資料の紹介が目的である。展示ケース（幅一、八〇〇×奥行一、〇〇〇×高さ九〇〇ミリ）二台と、掲示板の設置された壁面を利用し、小テーマ展示二つを中心に、帝国大学時代の工学部の表札や写真パネルを数点設置している。

注意すべき点として、この展示場所は資料の展示を想定して設計された空間ではなく、日中は常時扉が開放されている中央玄関に近い位置にあり、湿気や埃に晒されやすいことがあげられる。そのため展示ケース内には除湿剤を入れ、ケース外に複製資料や看板などの物品資料を設置、埃やカビには特に注意を払い、定期的な状態確認と入れ替えを行うようにしている。展示ケースにはUVカットフィルムを貼り付け、スポットライトと廊下の蛍光灯はLEDに交換した。これまで行ってきた展示は以下の通りである。

(1) 二〇一八年二月～二〇二〇年九月（図1）

テーマ①…工学部関係、法文学部本館

テーマ②…第三学生集会所三畏閣



図1 2018年12月～2020年9月の館内展示
(展示ケース奥：テーマ①、手前：テーマ②)

テーマ①には、旧工学部本館および旧法文学部本館の設計図（複製）と写真を壁面に、展示ケース内には工学部の卒業証書二点と大正時代のアルバムを置いた。テーマ②は、壁面に学生集会所三畏閣の写真パネルを設置し、ケース内に玄関に掲げられていた看板と部屋表札類を、取り壊し前の写真と一緒に展示した。いずれも、箱崎キャンパスで学んだ卒業生や教職員にとっては懐かしい建物である。建築図面の原本と、表札類（当館では、表札類も「文書資料」の一部として積極的に収集を行ってきた）は特定歴公文書等として登録されているものであり、文書館収蔵資料の多様性を来館者に解説するきっかけとなった。

(2) 二〇二〇年一〇月～二〇二一年八月

テーマ①…法文学部

テーマ②…航空学教室

テーマ①は、旧法文学部の建築図面と、建築当初の建物内部・年代ごとの外観・取り壊し風景の写真パネルを設置した。ケース内は法文学部創立当初の公文書と、戦前期の法科研究室のアルバム、取り壊し前に撮影した玄関部意匠等の写真と、玄関設計図を置いた。テーマ②は、旧工学部航空学教室をテーマにし、壁面には年代ごとの外観と教室内部の写真パネルを設置し、ケース内には、建物表札を回収する際に共に収容した、風向計と外壁の一部を展示した。旧航空学教室の外壁には、太平洋戦争末期に空襲よけの黒塗迷彩が施されており、戦争遺跡として貴重なものであつ

たが、キャンパス移転に伴い取り壊された。ケース横には、新築時の設計図と迷彩偽装仕様書の複製を展示し、文書と物品を共に保存する意味を説明できるようにした。

(3)二〇二一年八月

テーマ①…箱崎キャンパス跡地工事地区の回収資料

テーマ②…旧工学部本館周辺の回収資料

大学文書館では、箱崎キャンパス跡地の工事現場から、取り壊された建物の一部や、工事作業中に掘り起こされた陶器・ガラス瓶類を回収した。その中には、九大マーク入りの陶器類や、インク瓶、酒瓶など昔の大学生活の様子がかがえるものが多数発見されたため、文書館の展示内容としてはやや異色かもしれないが、工事現場の写真とともに展示することにした(テーマ①)。手前の壁面に、番号を振ったキャンパス跡地の工事写真と、旧キャンパスマップを設置し、撮影場所と方角がわかるようにした。ケース内には、陶器やガラス瓶類を並べた。テーマ②では、工事現場と旧工学部本館建物周辺から回収したレンガやタイルなど、建築資材の一部を、過去の建て替え・改装の経過説明とともに置いた。ここでは、工科大学時代の赤煉瓦の一部、スレート片に加え、高温で変質したレンガとガラス瓶を、そして一九三〇年竣工時のスクラッチ化粧タイルと、張り替えられた現在の化粧タイルを比較できるようにケース内に設置した。

あくまで当館の例であるが、常設展示や特別展とは別に、小規模テーマ展示を行うメリットとして、①常設展や特別展の基本作業となる、②新規収蔵資料の調査・整理が進む、③学内関係者や来館者とのコミュニケーションおよび情報収集の促進、などが挙げられる。前掲(1)～(3)のいずれも、キャンパス移転工事に伴い新たに回収された資料を使用し、展示にともない整理・作成したデータの一部は、「常設展 九州大学の歴史」で利

用した。また、事務室・閲覧室の前での展示であることもあり、来館者および学内関係者との会話のきっかけになるほか、実験的に出した資料に対する反応は、展示資料の選定やパネルデザインに随時反映させている。

二 「常設展 九州大学の歴史」

(1) 常設展示企画に至る経緯

九州大学はもともと本部と医系以外の学部を福岡市東区箱崎に、旧教養部等を同市中央区六本松にしていたが、キャンパスの狭隘化により、新たに同市西区元岡・桑原地区に統合移転することとなった（伊都キャンパス）。移転は二〇〇五年から開始され、一八年に完了したが、この間の一四年には伊都キャンパス内に、最大三〇〇〇名を収容できるホールなどからなる椎木講堂が落成した。椎木講堂の一階には様々な展示を行うための「ギャラリー」（八〇平米）と「展示コーナー」（二六〇平米）（以下本稿では両室を合わせて「椎木講堂」展示スペースと呼ぶこととする）が設けられた（後掲図2下部）。

椎木講堂での展示に関しては、「本学の歴史や特筆すべき教育・研究の成果を展示し、学生ならびに教職員の知的好奇心を刺激することを通して、講堂設立の理念を実現するものとする」という基本方針が立てられ、この展示は学内だけでなく学外にも公開することとされていた。この基本方針に基づき、展示スペースでは、二〇一九年度までに後掲表2のような企画展示が催されていた。これら企画展示は、椎木講堂展示運営ワーキンググループ（WG）の委員が所属する部局において交互に実施するというのが実情であり、そのため担当部局の負担が大きく、継続的に企画展示を行うことが困難な状況になってきていた。そこで、展示スペースの有

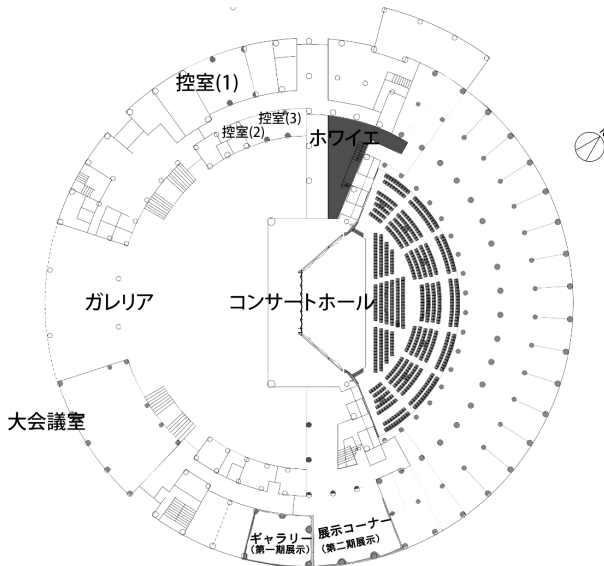


図2 椎木講堂1階平面図

効な活用手段として、自校史に関する常設展示を行うことが発案されたのである。

自校史常設展示の提案は、二〇二〇年二月二二日の椎木講堂展示運営WGで行われた。このWGで、総長裁定により予算を獲得し、九月に行われる予定のアカデミックフェスティバル前までに展示を開始するための準備を、大学図書館を中心として進めていく、ということを経の方向性として確認した。

こうして自校史常設展示の実施に向けて動き出すことになるはずであったが、ここでその動きを阻む重大な要因となったのが、新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) である。九大では三月の卒業式が各学部総代のみ出席という規模に縮小され、さらに四月の入学式は中止となった。緊急事態宣言の発出を受けて、新学期の授業は五月の連休明けからオンラインで行うこととなり、教職員も原則として在宅勤務となった。当館も休館、在

表 2 椎木講堂展示一覧

年度	会期	展示名	担当部局
2014	2014年3月25日 ～5月2日	「九州大学百年の至宝展」第1期	総合研究博物館
2014	2014年5月12日 ～10月3日	「九州大学百年の至宝展」第2期	総合研究博物館
2014	2014年10月14日 ～12月19日	「九州大学百年の至宝展」第3期	総合研究博物館
2015	2015年4月6日 ～24日	「ご存知ですか『芸術工学』」	芸術工学研究院
2015	2015年5月7日 ～9月4日	「奴国の南」	総合研究博物館
2015	2015年10月1日 ～30日	「写真で見る九大百年」	大学文書館
2015	2015年11月14日 ～22日	芸術工学会 2015 秋期大会「芸術工学企画展示」	芸術工学研究院
2016	2016年4月4日 ～7月1日	「九大の歴史を語る什器たち」	総合研究博物館
2016	2016年8月5日 ～9月27日	芸術工学の遺伝子 活躍する卒業生展	芸術工学研究院
2016	2016年10月5日 ～11月21日	「わすれもの——AQA プロジェクトの活動と未来」	人文科学研究院
2017	2017年3月28日～ 6月15日	「工学部の百年展」	工学研究院
2017	2017年10月～11月	フォトコンテスト写真展示	総務部総務課
2018	2018年3月20日 ～6月29日	理学研究院展	理学研究院
2018	2018年9月25日 ～2019年1月18日	「伊都につながる百年展 ありがとう箱崎キャンパス——学術遺産と学者たち——」	総合研究博物館・ 大学文書館
2018	2019年2月1日 ～3月20日	「とはすかたり——文学部の肖像——」	文学部・ 文学部歴史編纂室・ AQA プロジェクト
2019	2019年3月26日 ～5月13日	芸術工学の半世紀とこれから～ 芸術工学部創立 50 周年記念展	芸術工学研究院
2019	2019年9月24日 ～2020年4月30日	「農学部百年の至宝展」	農学研究院

宅勤務となったためにできる仕事は限られ、とても自校史展示の準備ができるような状況ではなくなった。緊急事態宣言は五月一四日に解除されたものの、当館の休館と在宅勤務を主とする体制は当面継続することとし、九大の行動制限が緩和された六月末から、ようやく閲覧等の一部再開、職員の原則出勤再開となった。

依然としてコロナ禍の始まる前に戻るにはほど遠い状況ではあったが、七月になってようやく自校史展示の準備が動き出すことになった。同月半ばに当館と総務部同窓生・基金課とのあいだで自校史展示に関する打合せが行われ、まずは九月一九日に延期されていた開学記念式典に合わせて暫定的な展示を行い、その後本格的な常設展示の準備を行うこととなった。また展示内容については当館と総合研究博物館の関係者で検討することとした。こうして常設展示開始への道筋が一応できたことにより、当館では業者に依頼し、常設展示のゾーンングプランを作成した。

ところが、その後のCOVID-19第二波や学内でのクラスターの発生を受けて、開学記念式典は出席者を限定したオンライン中継で挙行されることとなり、式典に合わせる予定であった展示開始も延期することとなった。一方で、一〇月から総長はじめ執行部が交代することとなっていたため、その前に自校史常設展示を実施する方向性だけは確定しておくために、九月二四日の椎木講堂展示運営委員会で展示実施が承認された。

こうしていったん仕切り直しとなり、一二月はじめに総合研究博物館と同窓生・基金課、当館の三者による打合せが行われた。ここで展示開始を二〇二一年五月とすること、一度に全部の整備を行うのではなく段階的な整備を行うこと、展示内容や予算に関しては展示経験の豊富な総合研究博物館の助言を得ることなどの方向性が打ち出された。また、役員への説明を行った上で、翌年一月中までに役員協議会の承認を得ることとなった。

この打合せを受けて、ギャラリーで常設展示前半部分（第五章まで）、展示コーナーで後半部分を展示することとし、前半を第一期工事として五月展示開始、後半を第二期工事として一〇月開始の予定とした。このスケジュールに基づき、再度業者にゾーニングプランの作成と工事費の見積もりを依頼した。

年が明けて二〇二一年一月には担当理事と総長への事前説明を行った上で、同月一八日の役員協議会に諮られ、展示計画が承認された。これにより二〇二一年度に自校史常設展示が開始されることが決定した。

展示開始が正式に決まったことで、本格的に準備を開始することとなった。まずはゾーニングをはじめとした展示プランの策定である。これについては二月初め、総合研究博物館の三名の教員に依頼し、業者の作成したプラン・見積もりを基に検討を行った。ここで特に指摘されたのは、プランにある展示スペースへの壁の設置であった。プランではオープンスペースである展示コーナーの入口側に壁を設置し、展示空間と講堂ロビーを完全に仕切るという設計になっていた。しかしこの検討では、見通しが悪くなることや今後展示を変更する際に移動が困難であることから壁の設置に否定的な意見が強く、代わりに入口を示すものとして旧箱崎キャンパス正門のレプリカを設置することが提案された。こうした意見に基づいて展示プランを修正した。

修正したプランに基づき業者に依頼して工事費用等を算定し、予算要求を行ったが、結果は要求額に対して三割以上削られるという大幅な減額となった。このためプランの大幅な見直しを行わざるを得ず、正門のレプリカ作成だけでなく、後述するようにその他の展示設備も削らざるを得なくなってしまう。

(2) 自校史展示の考え方

前述のように、自校史展示の準備が具体的に動き出した二〇二〇年七月の段階では、同年九月に暫定的な展

示を開始する予定であった。この暫定的な展示では、ギャラリーで評議会記録や建物図面などの九大の歴史を伝える文書館所蔵品を紹介し、展示コーナーには写真パネルを並べ、当館制作のビデオを上映することを考えていた。この暫定展示をしばらく行っているあいだに本格的な常設展示の準備をする、というのがこの時点で計画で、暫定展示の内容の具体化と同時に、常設展示の構成を考えており、次の一章からなる構成案を作成していた。

- 1 創立前史（賛生館 県立福岡病院 京都帝国大学福岡医科大学の創設）
- 2 九州帝国大学の創立（工科大学の創設 九州帝国大学の創立）
- 3 九州帝国大学の発展（農学部の創設 法文学部の創設 福岡高等学校の創立）
- 4 戦争と九州帝国大学（附置研究所の設置 理学部の創設 久留米高等工業学校の創立 学徒出陣・学徒動員）
- 5 新制九州大学の発足（文学部・法学部・経済学部の独立 新制九州大学の発足 教育学部の創設 分校の統合）
- 6 高度経済成長・大学紛争期の九州大学（薬学部の創設 歯学部の創設 九州大学の拡張 九州芸術工科大学の創立 大学紛争）
- 7 改革の模索（筑紫地区の建設 総合理工学研究科の創設 言語文化部の創設 教養部の廃止 独立研究科の増設）
- 8 学府・研究院制度の創設（大学院重点化 学府・研究院制度の創設 学府の新設）
- 9 国立大学法人九州大学の発足（九州大学と九州芸術工科大学の統合 国立大学法人九州大学の発足 共

創学部の創設

10 伊都キャンパス移転（病院地区の再開発 伊都キャンパス移転）

11 九州大学の学生生活（九州帝国大学の時代 戦中・戦後期 高度経済成長期 成長期からバブル期へ「失われた二〇年」の時代）

この構成案は、九大がこれまで編纂してきた五十年史・七十五年史・百年史の成果に基づき、九大の歴史の要点をわかりやすく示すことを目指したものである。この構成案で一つ特徴的なのは、学生生活を一つの章にまとめたことである。検討開始当初の段階では学生生活については各章にちりばめることを考えていたが、他の内容や資料に埋没させてしまうよりも、学生生活だけで一つの章としてまとめて、時代による変化などを見てもらう方がわかりやすいのではないかと思ひ、独立させることとした。学生生活は特に卒業生・在学生の関心の高い要素であることから、より観覧者の興味を惹くものとなるのではないかと考えたのである。

前述のとおり暫定展示は行わないこととなったため、右の常設展示の構成案に基づき準備を進めることとし、常設展示に関する考え方をまとめた企画案を作成した。二〇二二年一月一八日の役員協議会に椎木講堂展示運営委員会名で提出した企画案「椎木講堂展示スペースにおける自校史展示（常設展示）について」では、展示による効果等を、「自校史の展示を行い、高校生、在学生、同窓生、教職員、地域住民並びに国内外の教育研究機関や企業からの来訪者に広く公開することにより、以下の効果が期待されるとともに、本展示を通じて、本学への理解を深めてもらうことにより、レピュテーションの向上、将来的には大学への支援が期待できる」として、各対象への効果を次のように説明した。すなわち、学内者については「本学の歴史を深く知ることにより、帰属意識の向上が期待でき」、うち在学生は「在学中に本学への理解を深めることにより、将来、

同窓生として本学のサポーターになることが期待できる」こと、教職員は「大学に貢献する意欲を向上させること」や、「本学をアピールする材料をより多く持つことが期待できる」とした。学外者については、高校生は「本学の歴史を知ることにより、受験の動機付けになること」、同窓生は「学生時代の記憶を呼び覚ますことにより、愛校心の醸成」、地域住民は、「本学が地域社会の中に存在している意義を理解してもらうことにより、更なる地域連携強化」、最後に国内外の教育研究機関や企業からの来訪者は「本学の歴史を紹介することにより、信頼性の向上」、また「海外からの来訪者については、来訪者の所属機関等で本学についての周知に繋がり、留学生の獲得に寄与すること」がそれぞれ期待できるとした。また、椎木講堂の隣にオープンするフジギャラリーとの相乗効果も期待できるとしている。

ここに見られるように、展示の観覧者として想定しているのは、九州大学に関わるすべての人、である。企画展示であれば特定の対象を観覧者として想定することもあり得るであろうが、常設展示であるため、対象を絞り込まず、九州大学と様々なかたちで関わる多くの方々に、九州大学の歴史を幅広く知ってもらうことを目的とした。

展示資料については、当館が所蔵する文書資料を中心とし、あわせて写真やモノ資料等についても展示することとした。展示全体を九大の歴史の画期を区切りとした一一の章に分け、各章においてはパネルでその時代の九大について解説し、特に重要な関連資料をそれぞれに簡潔な説明を付して展示することとした。一一の章は以前に作成していた展示構成案のとおりである（一部構成や章および項目の表題を実際の展示にあたって変更した）。これらの各章に加え、大型の年表と、大型モニターによる映像コーナーも設けることとしていた。

以上の考え方と構成については役員協議会の了承を得たのであったが、前述の通り、予算が大幅に削られて

しまったため、展示の構成については再度検討が必要となった。その結果、資料展示に関しては基本的に構成案のままとしたが、年表と映像コーナーについては削らざるを得なくなった。とくに映像に関しては、これまで当館では多くの作品を制作しており、これを常時視聴できるようにする好機であったが、それを逃すことになってしまったことは、当館としては非常に惜しいことであった。

ともかくも、以上の考え方に基づいて、まず第一期展示について、各章の解説文案を作成し、その上でどの資料を展示するか、その詳細を検討して展示品一覧を作成した。その上で業者との調整を行って、展示の詳細設計を行った。この設計に基づいて設営作業を行い、展示のタイトルを「常設展 九州大学の歴史」として、二〇二二年五月一日の開学記念式典にあわせて第一期展示の公開を開始した。

続いて第二期展示についても第一期と同様の手順で展示品一覧を作成して業者に展示設計を依頼した。第一期展示では展示スペースに置かれていた既存の展示ケースを使用できたが、第二期展示では既存のケースだけでは不足したため新たにケースを作成する必要があるが、第一期よりも工事費が大幅に増えたことから入札を行った。落札した業者と細部の調整を行った上で設営工事を行い、二〇二二年一月末に工事が完了することになった。ただしCOVID-19の状況にかんがみて、第一期分・第二期分ともに当面は学内の希望者のみの観覧に限定している。フジイギャラリーが二〇二二年五月にグランドオープンを予定しており、「常設展 九州大学の歴史」もこれにあわせて学外者への公開を開始することを検討している。

(3) 準備状況と展示の概要

第一期は、第一章～第五章をギャラリー内に設置、第二期を第六章～第十一章とし、展示コーナーに割り当

てた。以下、具体的な準備作業の経過と、展示内容について紹介する。ただし、本稿執筆時点では第二期の準備中であるため、第一期分の内容に留まること、後述するように年二回程度の展示品の一部入れ替えを予定していることをお断りする。

まず、準備状況について。ギャラリー内には、ウォールケース二台のほか、覗きケース、行灯ケースが常備され、これまで物品や写真を用いた展示に利用されることが多かった(表2)。文書館の資料は、大半が大学運営に関わるもの、形態としては簿冊等の文書類が中心であり、また年代により、資料の残存数や種類に偏りもある。しかし来観者の興味を引くためには、写真や図面、物品など多様な資料を使用しながら、工夫して「通史」を見せていく必要がある。常設展は基本的に展示替えを行わない想定で、熟考して作成するのが理想であるが、具体的な作業開始から第一期公開まで実質三ヶ月弱という、限られた期間で準備するための工夫が求められた。全体の配置は、歴史的に貴重でかつ見栄えのよい創立期の資料をウォールケースに、残りの章は覗きケースに割り当て、左回りに年代を追うようにした(後掲図3)。残存資料の少ない第五章は、ギャラリー中央に新規の壁面を設置し、その周囲に覗きケースと行灯ケースを設置した。

制作物に関しては、各サイン類(入口タイトル・章タイトル・章解説)の制作を業者に依頼し、写真パネルとキャプションについては、文書館側で自作した。結果として、少々の費用削減と、開始直前まで内容検討の時間が確保できたほか、開場後も修正・差し替えが容易となった。また、観覧者動線と展示動線を一致させる上で、サイン類のデザインと配置も重要である。業者依頼分のパネルについては、各章で文書館側が選定した写真を基にデザインしてもらったほか、九大カラーを共通で使用し、会場全体の統一感を演出した。章タイトルは、木工パネルに塩ビ出力貼りで作成、ピクチャーレールを使用し、章の境目を強調できるようにした。そ

のほかに留意点として、資料は事前に全頁スキャニングか写真撮影を行い、閲覧希望者にデータを提供できるようにした。

以下、章・項目ごとにその概要を説明する。

アイキャッチ展示

ギャラリー入口から正面に、旧工学部本館三階休憩室用金属製六角シャンデリアを行灯ケースに設置した。入口を覗いた来観者の注意を引くとともに、精巧な造形を四方から鑑賞することができる。

第一章「創立前史」

「賛生館から県立福岡病院へ」…九大の前身は、一八六七年開設の藩校賛生館から始まり、県立福岡医学校、県立福岡病院と続く。この章では、福岡医学校の教員として招聘され、のち京都帝国大学福岡医科大学初代学長となる大森治豊と、小児科部長として県立福岡病院に赴任し、福岡医科大学小児科講座初代教授となる伊東佑彦の関係資料に加え、学生の医学校卒業証書と報賞状を展示した。

「京都帝国大学福岡医科大学の創設」…一九〇三年に京都帝国大学福岡医科大学が創設された。ここでは、小野寺直助（一九一七年に九州帝国大学医学部第三内科教授、のち附属医院長・医学部長）の福岡医科大学卒業証書および恩賜の銀時計と、「福岡医科大学各診療室及附属家新築建図」（一九〇七年一月竣工）を中心に置いた。医科大学時代の建築図面は、彩色が施されているものが多数現存しているが、実物の出品は初めてとなる。

第二章「九州帝国大学の創立」

「工科大学の創設」…ここでは、一九一〇年一二月に設置が公布された九州帝国大学工科大学に関する資料を

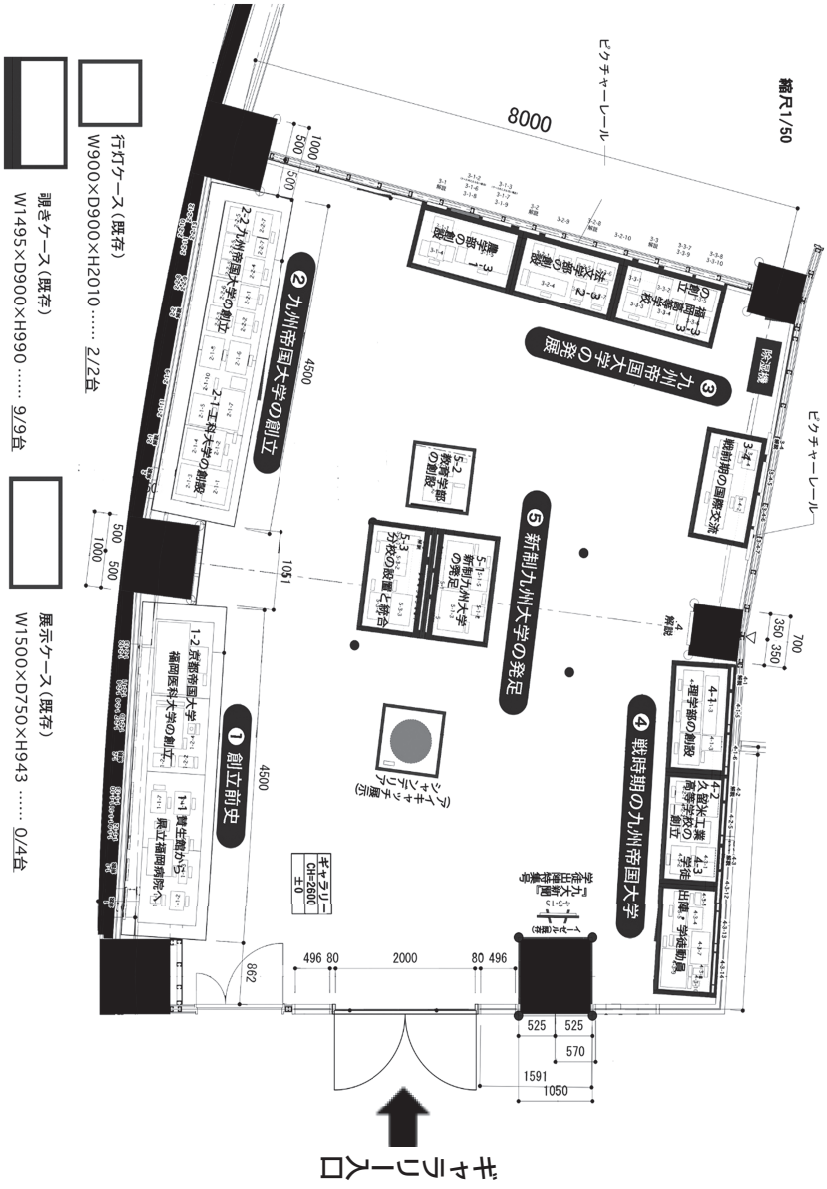


図3 第一期展示平面配置図



図4 アイキャッチ展示

展示した。壁面には工科大学本館建図を設置、床面には平面図を置き、アルバムと写真パネル、採鉱学科の実習報告書を展示した。なお、実習報告書は現在では閉山となっている鉱山のものが多く、貴重な資料となっている。

「九州帝国大学の創立」…一九一一年に、九州帝国大学は新設の工科大学に京都帝国大学から移管された医科大学を加えて創立された。初代総長には山川健次郎（日本最初の理学博士、元東京帝国大学総長）が就任した。ここでは山川関係の写真パネル三点と、総長訓示式辞のほか、『九州帝国大学時報』第一号、最初の評議会記録と学位綴など、大学創立初期の文書類を展示した。また卒業生の写真と、卒業式の式次第・答辞などを公開し、設立当初の理念・権威性と校風が感じられるようにした。

第三章 「九州帝国大学の発展」

「農学部」の創設」…九州帝国大学では将来の農科大学創設を目指し、一九一二年に朝鮮・樺太に演習林を設置、一九一九年に農学部として創設された。ここでは、『農学部要覧』のほか、朝鮮・台湾・樺太・槽屋各演習林の各概要を中心にして、教室・実験室の写真と、一九二一年に設置された附属農場の牛乳瓶を置いた。覗きケース外の壁面には、農学部構内空撮のほか、戦前期農学部の写真パネルを虫ピンで固定して展示した。

「法文学部の創設」…法文学部は一九二四年創設された。第一回入学生



図5 第2章「九州帝国大学の創立」

には九大最初の女子学生二名も含まれている。壁面に吊した法文学部本館（一九二六年竣工）の設計図をメインに、その下に写真を設置した。覗きケースには、初代学部長美濃部達吉筆の女子入学者についての書簡のほか、法文学部概況と講義題目、竣工当初の附属図書館外観および閲覧室と、教官の写真パネルを一緒に置いた。

「福岡高等学校の創立」…高等教育機関増設計画の一環として、一九二一年に福岡市大坪町（九州大学旧六本松地区）に福岡高等学校が創立され、九州・東京・京都をはじめとする各帝国大学に毎年多数の卒業生が進学した（一九四九年に新制九州大学に包括され第一分校になる）。壁面には、開校記念式典・本館・福高生の写真パネルを設置し、覗きケース内には『福岡高等学校一覧』と、評議員会会議録、初代学校長秋吉音治の写真、校友会雑誌と教科書類を展示した。

「戦前期の国際交流」…ここでは、中国をはじめ、朝鮮・台湾出身者などのアジア地域からの留学生についてと、来学した外国の著名人の資料を扱った。壁面にアインシュタイン来学時（一九二二年一〇月）の集合写真、若き日の郭沫若が写る医学部生集合写真、医学部の女子留学生の写真を設置した。ケース内には孫文来学時の歓迎会（一九一三年三月）の写真と、孫文揮毫の医科大学卒業アルバムなどを並べた。

第四章「戦時期の九州帝国大学」

第四章は、ガラス張り壁面の前に覗きケースを設置する配置となるため、壁面へのパネル固定と、ピク



図6 第4章「戦時期の九州帝国大学」

チャールレルの使用は不可となった。代わりに、覗きケース蓋部分の縁に、章解説と写真パネルを立てかけて固定した。

「理学部の創設」…理学部については、麻生太賀吉ほか地元財界からの寄附が大きな力となり、一九三九年四月に設置された。蓋上に写真二点を設置し、ケース内に麻生太賀吉と理学部創設期の教官の集合写真を、寄附払込年割書とともに置いた。そのほか、創設関係の庶務掛の書類、名古屋帝国大学初代総長澁澤元治の祝辞などを展示した。

「久留米高等工業学校の創立」…一九三九年五月、工業技術者の不足を補うため、久留米高等工業学校が久留米市小森野町に創設された（のち九州大学第二分校となる）。久留米高等工業学校については、当館所蔵資料すべてが文書資料であり、展示資料として適用できるものは少なかった。覗きケース一台に一項目を割り当てる構成が基本であるが、この項目は日誌二点と写真パネル三点を、ケース内の三分の二の範囲にまとめ、残り三分の一には「学徒出陣・学徒動員」の資料を置いた。

「学徒出陣・学徒動員」…一九三八年から始まった学徒勤労動員と、一九四三年以降の「学徒出陣」を扱う。この内容に関しては、来場者の関心が特に高いことが予想されたため、『防空演習関係書類綴』等大学側で作成した文書類だけではなく、「九大報国隊」の腕章、学徒出陣者の日記、学徒出陣のため繰り上げて発行された卒業証書など、個人寄贈の

資料を多く出品することで、当時の学生の状況が伝わるようにした。『九大新聞』学徒出陣特集号（一九四三年一〇月発行）は、内容を読めるように、A1に拡大印刷して設置した。

第五章 「新制九州大学の発足」

「新制九州大学の発足」…一九四九年五月、学制改革により新制九州大学が発足、旧制の九州大学・福岡高等学校・久留米工業専門学校が九大に包括され、一九五三年に新制の大学院も発足した。この章では、九州帝国大学と新制九州大学の卒業証書をメインに展示した。この年代は写真資料も少ないため、「昭和二十四年度新制九州大学入学志願者心得」の複製をフレームに入れて壁面に設置した。

「教育学部の創設」…新制九州大学発足に先立ち、法文学部は法・経済・文の三学部に分かれ、さらに新制大
学発足にあわせて、教育学部が創設された。この章は、前項よりもさらに写真、物品が乏しいため、幅の狭い
行灯ケースを割り当てた。床面に『米国人文科学顧問団記録』と、概要要求文書の複製パネルを設置し、四方
ガラス囲いの一面を黒塗りボードで潰して壁面として利用し、そこに章解説パネルと写真二点を貼り付けた。

「分校の設置と統合」…ここでは、第一分校（旧制福岡高等学校）・第二分校（旧制久留米工業専門学校）・第
三分校（旧西部第四十八部隊跡久留米市）の関係資料を展示した。壁面に写真を設置、ほか「九州大学福岡高
等学校」の標札（一九四九年度の第一分校には「九州大学福岡高等学校」と改称された旧制福岡高等学校が同
居、翌年廃校となった）、福高最後の記念祭となる創立二七周年記念祭の写真と、芸術祭プログラムなどを展
示した。

(4) 展示開始と反響

前述のように、「常設展 九州大学の歴史」の開始は COVID-19 流行のため、当初の予定から大きく変更された。二〇二一年一月現在においても見学は学内者に限り、かつ予約制としているため、展示への反響と呼べるものは未だいただける状況にない。ただし二〇二一年度秋学期に開講されている自校史教育「九州大学の歴史Ⅰ」にあわせて、担当教員の赤司が受講生を対象とした展示見学会を四回開催し、展示担当の中村が解説を行った。また展示解説をしないものの、日時を指定して学生に見学できるような期間を設けた。見学した学生には任意で展示に関するコメントを提出してもらったため、ここではいくつかを紹介することで自校史展示開始への反響に代えたい。

学生たちの大半は、「常設展 九州大学の歴史」を見たことで、九大の歴史的概要をつかみ、それによって現在の自分とのつながりを持つことができたと感じたようである。見学した学生の多くは、大学本体や各学部創設期における立役者や寄附者、地域社会の人びとの熱意に、文字・写真資料を通じて触れ、あらためて母校への誇りやさらなる学習意欲の高まりなどを感じた。とりわけ学生たちの反応の中で重要に思えるのは、学生たちが過去に共感し、そこから刺激を受けていることである。「戦争に行く前日の生徒の日記や学園祭のパンフレットなど、当時の実際の文章に触れることで、九大にも過去があり、そこで学生生活を送った人々がいることをより感じる事ができた」(法学部一年生) というコメントは、素朴な感想ではあるもののまさにそれを示している。また、「戦争に人生を左右され学生は満足に学ぶこともできなかった状況に憤りを覚えた。そういう時代と比べればずっと恵まれているかもしれないが、現在は違った理由から思うような学生生活を送

れていないこともあり少なからず共感できた」（文学部一年生）といったコメントも同様で、学生たちの目線はかつての学生への共感から思索を始めることがわかる。

次に紹介するコメントは、自校史展示の効果を雄弁に物語っているように思われる。

九州大学百周年記念事業という言葉を所々で聞くために、自らが身を置く大学に一〇〇年を超える歴史の蓄積があることを知識としては知りつつも、こと入学当初から移転後まもない伊都キャンパスでのみ大学生活を送ってきた我々学生にとって、「九州大学の歴史」を肌で感じる機会はそう多くない。戦前から残る人物はもちろん建造物や資料も生活の場には存在しなかった。久山町における疫学研究や農学部のカイコ研究など、個々の研究についての言及は基幹教育の授業等を通じて幾らかあったが、それは飽くまで九大の一部で行われてきた個々の事象を知るに留まっており、木は見えても森は見えていないという状態であったように思う。（中略）帝国大学設置の流れや戦時の学生にとって生きにくい状況の中で、大学がどのような変化を辿ったのか、自らの大学・学部はどういった下地を経て現在に至っているのか、肌感覚を持つきっかけになる展示であったように思う。（文学部三年生）

入学以来、自らの大学に関する断片的な知識が蓄積される一方で、大半の学生たちはそれが全体として何を意味し、自分たちとどのように関わるのかがよくわからないのが一般的であろう。自校史を概観することによって学生自らと断片的な大学に関する知識が結び付き、母校と自らのアイデンティティが接続する契機となったとするこのコメントは、まさに当館が自校史展示を企画した狙いに見事にはまってくれたうれいもの

である。

また間近に歴史資料を見たことにより、資料保存や管理の問題、資料が現在にまで残っていることの意義、さらには資料の活用について等を考える機会にもなった学生もいたことは興味深い。たとえば「展示品全体を通して、何十年も経った古びた様子が時代を感じさせ、より歴史が身に染みだが、現在は災害や事故による紛失などを防止するためにデータに入れて保存しているという話を聞いた。古い紙の状態を目にすることで感じるものがあると今回の展示で気づかされたので、実物は紛失されているが、データは残っている場合、どのような方法で展示をするのか気になった」（文学部一年生）というコメントであるが、他にも「それぞれの管理が難しいであろうということは、品々の様子から感じられた。薄い紙きれのようなものが価値を有し、かつもろさを持つ中で、保存という役割は欠かすことができない。〔中略〕現在の視点から見れば、自分が普段使っている、またはもらった物品の一つ一つは日常的な、何も歴史的なものでもないはずだ。それが時を経た瞬間、先述の価値を持つ。それをしらないために、昔の人はいらなくなったりしたらそのものをゴミに出す、つまり現代からしたら資料になりうるものを捨てる。そういったことを、残っている展示品の少なさから感じられた」（法学部一年生）という感想は、学生たちが自校史展示からアーカイブズの重要性に気づきを得たことを示している。

繰り返しになるが、以上で紹介した「常設展 九州大学の歴史」への反響は、自校史教育「九州大学の歴史Ⅰ」を受講している学部一・二年生を中心としたものである。今後、講義が進めば、あらためて展示を見に来たいという者も少なくなかった。また一般公開後に訪れるであろう卒業生たちの視点は現役の学生とは全く異なることが予想される。機会を見つけて、第二期展示や全体を通しての反響についても紹介したい。

おわりに

以上、九州大学大学文書館における展示活動と、二〇二二年度に新たに開始した「常設展 九州大学の歴史」について、その経緯や内容を紹介した。もともと当館は専用の展示室を持たないものの積極的な展示活動を行っており、そうした活動が新しく開始した自校史常設展示につながっていった。こうした経緯は他大学の自校史常設展示についても同様の場合が多いであろう。

一方で、展示以外の用途のためにつくられた場所を展示室に改造した例は少なくないであろうが、「常設展 九州大学の歴史」のように、全学的な展示スペースとしてつくられた場所を、そのまま自校史常設展示の会場としたという例は少ないのではないか。かつ、その展示スペースが性格を異にする二つの部分に分かれていることもあって、設営および公開開始時期を二回に分ける必要があったことも、類例はあまりないであろう。また、COVID-19とどう一種の災害に見舞われながら準備を進めねばならなかったことや、予定していた公開開始時期を感染状況等によって幾度も遅らせざるを得なかったということも、この常設展の特異な点である。

今後の方針としては、年二回程度の展示品入れ替えを行うことで、資料の保護を行うとともに、観覧者が新たな資料に接する機会を持てるようにする予定である。今回は断念した年表と映像のコーナーについても、いざずれ予算を獲得して実現を期したい。また、これまで行ってきた小規模展示についても継続し、機会があれば企画展も行いたいと考えている。

こうした方針や展望を持っているが、何よりも重要なのは、コロナ禍が収束し、誰もが自由に展示を観覧で

きるようになることである。九大は国内だけでなく海外からの訪問者をもと多数あったが、COVID-19のために学外からの訪問者はほとんどいなくなってしまった。様々な属性を持つ訪問者が以前のように多数来学し、当館の展示を観覧していただける日が来ることを願っている。伊都キャンパスにおいては本稿でも登場したフジイギャラリーのほか、各部署等が行っている展示もあり、そうした展示をめぐる回遊性を実現できれば、「常設展 九州大学の歴史」の価値もより高まると考えている。

本稿で紹介してきたことが今後自校史展示の開始を検討している各大学等の参考になれば幸いである。

注

- (1) 当館の沿革については詳細は、『九州大学百年史』第七巻部局史編IV第四七編「大学文書館」(https://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/opac/download_md/1801803/chapter_47.pdf)を参照されたい。
- (2) 一九九八年、国立大学としては最初の試みとなった講義「九州大学の歴史」を開始した。翌年にはリレー講義形式の「大学とはなにか——ともに考える——」も始まり、以降現在に至るまで両講義は継続している。とりわけ「大学とはなにか」は、当館の所蔵資料をもとに教科書『大学とはなにか——九州大学に学ぶ人々へ——』（新谷恭明・折田悦郎編、海鳥社、二〇〇二年）を刊行している。九州大学の自校史教育に関する詳細は、折田悦郎ほか「自校教育」の意義とその可能性を探る」（『大学教育研究フォーラム』一一、二〇〇六年）、折田悦郎「大学文書館の設置と「自校史」教育」（『神戸大学史紀要』七、二〇〇七年三月）、同「九大の歴史・今後の課題と展望」（『大学教育研究フォーラム』一四、二〇〇九年）を参照。
- (3) 「九州大学大学文書館における特定歴史公文書等の利用等に関する規程」（平成二二年度九大規程第一五三号。施行：二〇二一年四月一日。最終改正：二〇二二年八月四日（同年度九大規程第六八号））。

- (4) とりわけ六本松地区は旧制福岡高等学校の流れを汲み、かつ新入生が教養課程（旧教養部）の授業を受けるため最初に通学していた場所であり、卒業生の思い入れの強いキャンパスであった。
- (5) 「記憶の保存」プロジェクトと同様、移転後に再開発が行われる予定だった六本松、箱崎キャンパスの建物や景観を記録保存する試みとして、模型製作を行った。なおこれらの模型は単にキャンパスのみに止まらず、その周辺までを含んでいたことが、卒業生らの学生生活にまつわる記憶と感情をいっそう喚起したようである。
- (6) フジギャラリーは、イフジ産業株式会社創業者藤井徳夫氏の寄附により建てられた展示施設で、総合研究博物館が運営している。